食品安全委員会第656回会合議事録

1. 日時 平成29年7月4日（火） 14：00～14：43

2. 場所 大会議室

3. 議事

(1) 農薬専門調査会における審議結果について

- ・「フルバリネット」に関する審議結果の報告と意見・情報の募集について

(2) プリオン専門調査会における審議結果について

- ・「牛由来ゼラチン及びコラーゲンの肥料利用に関する規制の見直し」に関する審議結果の報告について

(3) 食品安全基本法第24条の規定に基づく委員会の意見について

- ・農薬及び添加物「フルジオキシニル」に係る食品健康影響評価について
- ・農薬及び添加物「プロピコナゾール」に係る食品健康影響評価について
- ・農薬「ジクロロプロップ」に係る食品健康影響評価について
- ・農薬「デスメディファム」に係る食品健康影響評価について
- ・農薬「フェンブコナゾール」に係る食品健康影響評価について
- ・遺伝子組換え食品等「JPAo001株を利用して生産されたリパーゼ」に係る食品健康影響評価について
- ・遺伝子組換え食品等「除草剤グリホサート及びグルホシネート耐性トウモロコシMZHGOJG系統（食品・飼料）」に係る食品健康影響評価について

(4) その他

4. 出席者

(委員)

佐藤委員長、山添委員、吉田委員、山本委員、石井委員、堀口委員、村田委員

(事務局)

川島事務局長、東條事務局次長、松原総務課長、関野評価第一課長、
鋤柄評価第二課長、岡田情報・勧告広報課長、池田評価情報分析官、
箆島リスクコミュニケーション官、橘評価調整官

5. 配付資料

資料1 農薬専門調査会における審議結果について<フルバリネット>

- 資料 2 牛由来ゼラチン及びコラーゲンの肥料利用に関する規制の見直しに係る審議結果について
- 資料 3-1 農薬及び添加物に係る食品健康影響評価に関する審議結果について<フルジオキシニル（第5版）>
- 資料 3-2 農薬及び添加物に係る食品健康影響評価に関する審議結果について<プロピコナゾール（第2版）>
- 資料 3-3 農薬に係る食品健康影響評価に関する審議結果について<ジクロルプロロップ>
- 資料 3-4 農薬に係る食品健康影響評価に関する審議結果について<デスメディファム>
- 資料 3-5 農薬に係る食品健康影響評価に関する審議結果について<フェンブコナゾール（第5版）>
- 資料 3-6 遺伝子組換え食品等に係る食品健康影響評価に関する審議結果について<JPAo001株を利用して生産されたリパーゼ>
- 資料 3-7 遺伝子組換え食品等に係る食品健康影響評価に関する審議結果について<除草剤グリホサート及びグルホシネート耐性トウモロコシMZHGOJG系統（食品）>
- 資料 3-8 遺伝子組換え食品等に係る食品健康影響評価に関する審議結果について<除草剤グリホサート及びグルホシネート耐性トウモロコシMZHGOJG系統（飼料）>

6. 議事内容

○佐藤委員長 ただ今から第656回「食品安全委員会」会合を開催いたします。

本日は7名の委員が出席です。

それでは、お手元にございます「食品安全委員会（第656回会合）議事次第」に従いまして、本日の議事を進めたいと思います。

まず、資料の確認を事務局からお願いいたします。

○松原総務課長 本日の資料は10点ございます。

資料1が「農薬専門調査会における審議結果について」、資料2が牛由来ゼラチン及びコラーゲンの肥料利用に関する規制の見直しに係る審議結果について、資料3-1が「農薬・添加物評価書（案）フルジオキシニル（第5版）」、資料3-2が「農薬及び添加物に係る食品健康影響評価に関する審議結果について」、資料3-3から3-5までが、いずれも同じ資料名で「農薬に係る食品健康影響評価に関する審議結果について」、資料3-6から3-8までが、いずれも同じ資料名で「遺伝子組換え食品等に係る食品健康影響評価に関する審議結果について」でございます。

不足の資料等はございませんでしょうか。

○佐藤委員長 よろしゅうございますか。

続きまして、議事に入る前に「食品安全委員会における調査審議方法等について」に基づく事務局における確認の結果を報告してください。

○松原総務課長 事務局において、平成29年1月10日の委員会資料1の確認書を確認しましたところ、本日の議事について、委員会決定に規定する事項に該当する委員はいらっしゃいません。

○佐藤委員長 確認書の記載事項に変更はなく、ただ今の事務局からの報告のとおりでよろしいでしょうか。

(「はい」と声あり)

○佐藤委員長 ありがとうございます。

(1) 農薬専門調査会における審議結果について

○佐藤委員長 それでは、議事に入ります。

「農薬専門調査会における審議結果について」であって、本件については、専門調査会から意見・情報の募集のための評価書案が提出されています。

まず、担当の吉田委員から説明をお願いいたします。

○吉田委員 承知いたしました。

それでは、お手元に資料1を御用意ください。「農薬・動物用医薬品評価書(案)フルバリネート(第2版)」でございます。本剤は第2版でございますので、今回、変更のあったところのみをピックアップしてお話ししたいと思います。

本剤は、名前を見てお分かりになるように、ピレスロイド系の殺虫剤でございます。今回、農薬専門調査会では主に急性参照用量の審議を中心に議論をしていただきましたので、そちらについて主にお話ししたいと思います。

資料1の54ページ、表47を御覧ください。こちらに急性参照用量設定のエンドポイントとなる幾つかの試験が一覧で記載されております。この中で最も低い用量の試験がラットの発生毒性試験の母動物で見られた流涎をエンドポイントに1、もう一つが、その上の用量として28日間神経毒性試験、これは神経毒性を検出することを指標に行った試験ですが、この試験における無毒性量6で、エンドポイントがその上の量、20 mg/kg 体重

／日で認められました活動低下と円背位でございます。

こちらは確かに1というのが一番低いのですが、そこについては詳細に食品健康影響評価、47ページが一番下の段落から記載がされております。

発生毒性試験から無毒性量1は得られているのですが、この最小毒性量が10であったこと、そして、28日間で無毒性量6という用量が既に得られているから、これらを総合評価していただきまして、単回投与により生ずる可能性のある毒性影響といたしまして、無毒性量6と設定をしていただきました。これを安全係数の100で除しまして、急性参照用量0.06が得られました。ADIについては変更はございません。

詳細については事務局より追加をお願いいたします。

○関野評価第一課長 それでは、引き続き、資料1に基づきまして、少し説明を加えたいと思います。

まず、本剤、フルバリネートに関しまして、審議の経緯のところを紹介します。3ページをお願いいたします。下ほどから第2版関係と書いてございますけれども、今回は、だいた、えんどう等に関しまして、適用拡大に伴いまして評価依頼を受けたものでありまして、本年2月21日の本委員会で要請事項説明を受けた後、評価第一部会を中心に審議を行ってきたものになります。

本剤の概要に関しましては、8ページになりますけれども、先ほど吉田委員からも御紹介がありましたとおり、合成ピレスロイド系の殺虫剤ということでございます。

次にめくっていただいて、9ページに今回の関係を書いております。今、説明しましたように、適用拡大を受けた形での評価となっております。

この後、幾つか最近の評価書の記載ぶりに沿いまして記載整備を行っておりますけれども、追加資料が提出された関係で申しますと、28ページまで飛ばさせていただきます。28ページ、「6. 作物等残留試験」の結果を示してあるところでございまして、(1)作物残留試験の結果について、今回、記載が変更されております。ただ、内容としましては記載整備を今回行っております。最大残留値に関しましては、キウイフルーツ(果皮)の値であります11.5 mg/kgということでございまして、加えて可食部におけます最大残留値も別に記載をするという形で、最近の評価書の記載ぶりに沿いまして、少し詳しく記載を整えているということでございまして、今回提出されただけ等に関しまして残留試験の結果がここに反映されているものではございません。

次に、もう一つ追加データがございまして、37ページになります。下から2行目から始まっています(6)ラットの28日間亜急性神経毒性試験の結果です。今回、次のページにまたがっておりますが、この試験の中でも無毒性量が得られているということでございます。

最後、食品健康影響評価が47ページから始まっておりますけれども、前回までの版と同様、下から4段落目にありますとおり、農産物中の評価対象物質として親化合物のみと

されておりまして、その後のADIあるいはARfDに関します記述、それから値に関しましては、先ほど吉田委員から御説明のあったとおりでございます。

本剤につきまして、このような内容に関しまして御了解いただけるようであれば、明日から30日間、国民からの意見・情報の募集を行いたいと思っている案件でございます。

説明は以上でございます。

○佐藤委員長 どうもありがとうございました。

ただ今の説明の内容あるいは記載事項について、御意見、御質問がございましたら、お願いいたします。

村田委員、お願いします。

○村田委員 ちょっと確認で教えてほしいのですけれども、ARfDを求める時の表47の見方です。説明は分かったのですけれども、確認なのですが、発生毒性試験と28日間亜急性神経毒性試験を比べていますけれども、結局これは同じような毒性を同じ動物で見ていると考えてよろしいのでしょうか。

○吉田委員 これは公比の問題だけでありまして、無毒性量と最小毒性量との間が発生毒性試験の場合、10開きがあるのですけれども、その間に神経毒性、今回、円背位及び活動性低下という明らかな毒性が20で認められ、認められない量が6で得られているので、発生毒性試験の母動物で得られた1を持ってくるのは非常にコンサバな値だろうということ、この6というのを、単回投与で起き得る影響と設定していただいたということになります。

○村田委員 質問の意味は、公比は分かったのですけれども、それを類似の毒性だと思って考えてよろしいのか。違う毒性だとそのようなことをしていいのか、よく分からなかったのです。

○吉田委員 見られる変化というのは、臨床症状ですから、そういう意味では同じでございます。ただ、今回、ピレスロイド系ということもございますので、神経毒性が剤のプロフィールとしてはございます。そういう意味では、神経毒性から持ってくるのが本来が一番妥当であろうということも追加としてあると思います。同じ実験ではございませんので。

○佐藤委員長 村田委員の御質問は、両方流涎があるというところを多分御覧になっているのだと思います。

○村田委員 そうです。動物実験をよく知らないのですけれども、それが似ていて同じよ

うに考えればいいのかなど思ったものですから。それだけではないということですね。

○吉田委員 流涎に対しては大変難しいところがございまして、神経毒性としての流涎と、あとは局所刺激としての流涎がございます。確かに流涎というものはあるのですが、いつも流涎があったらとるかという訳ではないので、さらに今回は、雄で幾つか他のエンドポイントも見つかっているということも重要なポイントであるということをお説明したいと思います。

○佐藤委員長 今のようなものは、実験でドーズを振ってやっている時には起こるような問題かもしれないですね。

他に何か御質問等ございますでしょうか。よろしいですか。

それでは、本件については、意見・情報の募集手続に入ることとし、得られた意見・情報の整理、回答案の作成及び評価書案への反映を農薬専門調査会に依頼することとしたいと思います。

(2) プリオン専門調査会における審議結果について

○佐藤委員長 次の議事に移ります。

「プリオン専門調査会における審議結果について」です。

本件は、専門調査会における審議が終了しております。

それでは、担当の山本委員から説明をお願いいたします。

○山本委員 御説明いたします。お手元の資料2を御用意ください。

この件は、農林水産省から諮問のあった牛由来ゼラチン及びコラーゲンの肥料利用に関する規制の見直しについてです。6月22日に開催された第105回プリオン専門調査会で農林水産省から諮問の内容について説明がなされた後、審議が行われました。審議の結果、次に示す理由から、人の健康に及ぼす影響が変わるものではないと考えられました。

肥料用ゼラチン等を施肥された植物体を人が摂取した場合のリスクについては、既に牛の部位を原料とする肉骨粉等の肥料利用に係る「食品健康影響評価について（回答）」において、原料となる部位が特定危険部位以外の部位である場合には、牛由来の牛肉及び牛内臓の摂取に由来するリスクと変わらないと評価していること。

2番目に、牛の骨を原料として、意見を求められた原料加工措置の条件のもとで製造された肥料用ゼラチン等に対する摂取防止措置を不要とする見直しについては、食用ゼラチン等に係る「食品健康影響評価について（回答）」において、当該処理が異常プリオンたん白質の感染性の低減効果を有することを確認していること、並びに「牛海綿状脳症対策の見直しに係る食品健康影響評価」において、現在の牛群のBSE感染状況のもとでは、30

カ月齢以下の牛で、中枢神経組織中に異常プリオンたん白質が検出可能な量に達する可能性は非常に小さいと評価されていることを踏まえれば、管理措置を前提とする限りにおいて、現行の飼料規制の効果への影響を及ぼすことは考えがたいこと。

3番目に、牛の皮については、食用ゼラチン等に係る「食品健康影響評価について（回答）」において、異常プリオンたん白質が蓄積しない部位と判断していること。

さらに、摂取防止措置を不要とする見直しが行われた後においても、家畜への使用及び牧草地への施用を禁止する旨の容器への表示等の管理措置は引き続き義務とされていること。

以上を踏まえまして、プリオン専門調査会では、本見直しによって、人の健康に及ぼす影響が変わるものではないと結論づけられました。

以上です。

○佐藤委員長 ありがとうございます。

ただ今の説明の内容あるいは記載事項について、御意見、御質問がございましたら、お願いいたします。特にございませんか。

それでは、本件については、資料2に記載のプリオン専門調査会におけるものと同じ結論とし、この結論を踏まえると、食品安全基本法第11条第1項第2号の「人の健康に及ぼす悪影響の内容及び程度が明らかであるとき」に該当するものと認められるとともに、同規定に関するこれまでの取り扱いと同様に、意見・情報の募集手続は行わないこととしてよろしいでしょうか。

（「はい」と声あり）

○佐藤委員長 ありがとうございます。

それでは、事務局は手続をお願いいたします。

（3）食品安全基本法第24条の規定に基づく委員会の意見について

○佐藤委員長 次の議事に移ります。

「食品安全基本法第24条の規定に基づく委員会の意見について」であります。

農薬及び添加物2品目、農薬3品目、遺伝子組換え食品等3品目に関する食品健康影響評価であります。

まず、農薬及び添加物2品目のうち、フルジオキソニルに関する食品健康影響評価について審議をお願いしたいと思います。

本件については、本年4月25日の第647回委員会会合におきまして、厚生労働省から評価依頼があった際に、本委員会が既に食品健康影響評価の結果を有しているため、平成21年

10月8日付の食品安全委員会決定「食品安全委員会が既に食品健康影響評価の結果を有している評価対象について、食品安全基本法第24条の規定に基づき意見を求められた場合の取扱いについて」に基づき検討を行い、委員会において審議し、必要に応じて評価書を改定することとしておりました。本日、その審議を行いたいと思います。

まず、担当の吉田委員から説明をお願いいたします。

○吉田委員 承知いたしました。

資料3-1を御用意ください。「農薬・添加物評価書（案）フルジオキシニル」につきましては、本委員会直接審議いただくために、本日の資料として提出をしております。

本品目につきましては、新たに提出された資料は作物残留試験の結果のみであり、一日摂取許容量（ADI）及び急性参照用量（ARfD）の変更はございません。

詳細につきましては、事務局より説明をお願いいたします。

○関野評価第一課長 それでは、引き続き、資料3-1を御覧ください。

まず、5ページをお願いいたします。5ページ下ほどから次の6ページにかけて、経過を書いてございまして、今回は適用拡大に絡む評価依頼ということでありまして、先ほど委員長からお話がありまして、本年4月25日の委員会におきまして、要請事項説明を受けた際、この委員会で審議をするとされたものでございます。

12ページをお願いいたします。重版でございますが、一応、剤の概要としてこちらに示してございまして、構造式を初めとして、フェニルピロール系の殺菌剤ということで記載してございます。本剤、添加物として、防かび剤としての使用もございまして。

今回追加された資料の関係で申し上げますと、26ページの下ほどから作物残留試験の結果がございまして、最大残留値の記載、最後の行から次のページにかけてでございますが、今回の資料に基づきまして、オリーブの葉で認められました47.1 mg/kgということで記載が整備されてございます。以前までは、最終散布3日後に収穫いたしましたにらの値として6.14 mg/kgというものがございました。

今回のこういった試験の提出に伴いまして、次の28ページの（4）推定摂取量のところに関しましても、表12の値が変更になってございます。

そして、食品健康影響評価は50ページになります。今、申し上げたような最大残留値等に関します記載を改めた上で、50ページの最後の行になりますが、従前と変更ございませんが、農産物、畜産物、魚介類に関します暴露評価対象物質は親化合物のみとした上で、ADI及びARfDが設定されておきまして、こういった値に関しましては、前版までと変更ございません。

以上のような評価書案でございますので、本案件に関しましては、平成21年10月8日付の食品安全委員会決定に基づきまして、国民からの意見・情報の募集を行うことなく、リスク管理機関にお返ししたいと考えている案件でございます。

説明は以上でございます。

○佐藤委員長 ありがとうございます。

ただ今の説明の内容あるいは記載事項について、御意見、御質問がありましたら、どうぞ、お願いいたします。特にございませんか。

それでは、本件については、意見・情報の募集手続は行わないこととし、以前の委員会で決定した評価結果と同じ結論、すなわちフルジオキソニルのADIを0.33 mg/kg 体重/日、ARfDを2.5 mg/kg 体重と設定するというところでよろしいでしょうか。

(「はい」と声あり)

○佐藤委員長 ありがとうございます。

続きまして、残りのプロピコナゾールに関する食品健康影響評価であります。

本件については、専門調査会における審議、意見・情報の募集の手続が終了しております。

それでは、事務局から説明をお願いいたします。

○関野評価第一課長 それでは、お手元の資料3-2を御用意ください。プロピコナゾールに関しまして、国民からの意見・情報の募集を行った結果について報告をしたいと思っております。

まず、審議の経緯に関しましては、4ページから5ページにかけて記載がございまして、5ページを御覧いただきますと、本年5月23日の本委員会におきまして、それまで農薬専門調査会で行ってきました審議結果について報告をさせていただきますと、その翌日から国民からの意見・情報の募集を行ったものになります。

募集結果を報告する前に、まず、剤の概要について少しおさらいをいたしますと、11ページをお願いいたします。御覧いただきますように、本剤は殺菌剤であります。収穫後の添加物としての用途もございまして、防かび剤としての使用もございまして、

下から3行目にございまして、トリアゾール系に属するものとして分類されておりました。次の12ページに書いてございまして、今回の評価依頼に関しましては、畜産物に関しまして基準値の設定、そして、防かび目的で収穫後に添加物として使う場合に関する指定要請、その関係での評価ということになりました。あわせて、急性参照用量の設定についても検討を行っております。

その結果に関しましては、食品健康影響評価のところを御覧いただきたいと思いますが、68ページから69ページにかけて記載がございまして、69ページを御覧いただきますと、上から5段落目になりますが、暴露評価対象物質に関する記述がございまして、農産物に加えまして、今回、畜産物も親化合物のみと設定がなされているものでございまして、

急性参照用量に関しましては、ラットの急性神経毒性試験の結果をもとにいたしまして設定されてございまして、ADIについては、前回までの初版と変更ございません。

そういった審議結果に関しまして、国民からの意見・情報の募集を行った結果が、この資料の最後の1枚についてございます。最後のページになりますが、期間中に寄せられました意見・情報はございませんでした。

したがって、本剤に関しまして、内容を変更することなく、リスク管理機関にお返ししたいと思っております。今回の評価書案に加えまして、トリアゾール系の剤でございますので、いつものようにトリアゾール共通代謝物に関する資料も添付した上で通知したいと考えております。

以上でございます。

○佐藤委員長 ありがとうございます。

ただ今の説明の内容あるいは記載事項について、御意見、御質問がございましたら、お願いいたします。特にございませんか。

それでは、本件については、農薬専門調査会におけるものと同じ結論、すなわちプロピコナゾールのADIを0.019 mg/kg 体重/日、ARfDを0.3 mg/kg 体重と設定するということがよろしいでしょうか。

(「はい」と声あり)

○佐藤委員長 続きまして、農薬3品目に関する食品健康影響評価でありまして、これらは専門調査会における審議、意見・情報の募集の手続が終了しております。

それでは、事務局から説明をお願いいたします。

○関野評価第一課長 それでは、資料3-3から3-5まで、3種類使いまして、まとめて報告をしたいと思っております。

まず、3-3になりますが、剤の名前はジクロロプロップでございまして、9ページになりますが、剤の概要を書いてございまして、植物成長調整剤として用いられるものでございます。今回、初版の評価書ということになります。

済みませんが、ページを戻っていただいて、4ページになりますけれども、審議の経緯を書いてございまして、中ほどから少し下の部分になりますが、今年5月16日の本委員会で、これまでの農薬専門調査会での審議結果について報告をさせていただきます。その翌日から30日間、国民からの意見・情報の募集を行ったものになります。

なお、この後の資料3-4、3-5で示しますデスメディファムとフェンブコナゾールに関しまして、審議の経緯のところは同様でございますので、この後の説明は省略をさせていただきます。と思っております。

資料3-3のジクロロプロップに関しまして、食品健康影響評価のところになりますが、45ページから始まってございます。45ページの下から3段落目になりますが、農産物中の暴露評価対象物質に関する記述がございまして、親化合物のみということで整理がされておりました、次の46ページにございますようなADIにつきましては、ラットの併合試験の結果に基づき設定をされ、急性参照用量に関しましては、マウスの一般薬理試験の結果に基づきまして設定がされてございます。

本剤に関しまして意見・情報の募集結果については、最後の1枚のところを書いてございますが、期間中に寄せられました意見・情報はございませんでした。

次に、資料3-4をお願いいたします。デスメディファムに関してです。

経緯のところは省略いたしまして、8ページ、剤の概要になりますけれども、本剤は除草剤として用いられるカルバニラート系の農薬でございます。

食品健康影響評価が42ページにありますけれども、このデスメディファムに関しまして、評価書としては初版になります。

42ページの下から8行目あたりに暴露評価対象物質の記述がございまして、農産物中の暴露評価対象物質に関しまして、親化合物のみと設定されております。

ADIとARFDに関しましては、次の43ページに書いてございますが、ADIに関しましては、ラットの併合試験の結果に基づき設定され、急性参照用量に関しましては、ウサギの発生毒性試験から得られました無毒性量をもとに設定されているというものでございます。

本剤の意見・情報の募集結果は、この資料の最後から2枚目のところを御覧いただければと思います。本剤に関しまして、期間中に寄せられました意見・情報はございませんでした。

最後の1枚のところには正誤表をつけてございますけれども、左側が変更後になりますが、該当箇所でございますと、52ページの急性参照用量の設定の検討を行う際のいつもの表の部分、表43になります。こちらの表の欄外です。表の下の脚注の記載に関しまして、右側の記載から改めまして、「無毒性量」という形で部分訂正をさせていただければと思っております。

最後、資料3-5をお願いいたします。フェンブコナゾールに関してです。

こちらも経緯のところは同様ですので省略をさせていただきます、剤の概要が10ページになります。本剤は、構造式を御覧のとおり、トリアゾール系でございまして、殺菌剤としての用途がございます。

食品健康影響評価が39ページから始まってございまして、次の40ページ、上から3行目、4行目のところに暴露評価対象物質の記載がございます。農産物中ということで、親化合物のみと設定されております。

そして、今回は重版、第5版でございまして、急性参照用量の設定も行われておりまして、40ページ、下のところがございますとおり、急性参照用量はラットとウサギの発生毒性試験の結果から得られたNOAEL、無毒性量をもとに設定がされておりました、ADIに関し

ましては、前回と変わらず、ラットの併合試験の結果から求められております。

本剤の意見・情報の募集結果は、この資料の最後のページになります。期間中に寄せられました意見・情報はございませんでした。

以上、3剤について報告をいたしました。いずれも寄せられました意見・情報はございませんでしたので、一部、デスメディファムに関しまして記載内容の訂正をさせていただいた上で、この3つの評価書案に関しまして、リスク管理機関に基本、変更なくお返ししたいと考えている案件でございます。

以上でございます。

○佐藤委員長 ありがとうございます。

ただ今の説明の内容あるいは記載事項について、御意見、御質問がございましたら、お願いいたします。よろしいですか。特にございませんか。

それでは、本件については、農薬専門調査会におけるものと同じ結論、すなわちジクロロプロップのADIを0.036 mg/kg 体重/日、ARfDを0.3 mg/kg 体重と設定する。デスメディファムのADIを0.032 mg/kg 体重/日、ARfDを0.9 mg/kg 体重と設定する。フェンブコナゾールのADIを0.03 mg/kg 体重/日、ARfDを0.3 mg/kg 体重と設定するというようによろしいでしょうか。

(「はい」と声あり)

○佐藤委員長 ありがとうございます。

続きまして、遺伝子組換え食品等3品目のうち「JPA001株を利用して生産されたリパーゼ」及び「除草剤グリホサート及びグルホシネート耐性トウモロコシMZHGOJG系統(食品)」に関する食品健康影響評価でありまして、本件については、専門調査会における審議、意見・情報の募集の手続が終了しております。

それでは、事務局から説明をお願いいたします。

○池田評価情報分析官 それでは、資料3-6をまずお願いいたします。

3ページに審議の経緯がございますけれども、こちらに記載のとおり、5月23日の第650回の食品安全委員会で御報告を行いまして、6月22日まで意見・情報の募集を行いました案件でございます。

本件のリパーゼでございますけれども、生産菌株は、生産性を高めるために *Aspergillus oryzae* IF04177株を宿主といたしまして、*Thermomyces lanuginosus*由来のリパーゼ遺伝子と *Fusarium oxysporum*由来のリパーゼ遺伝子の融合遺伝子を導入することで作製されているということでございます。

この添加物自体は、トリグリセライドなどのエステル結合を加水分解して脂肪酸を遊離

させるという酵素でございまして、製パン及び油脂精製に利用されるものというところでございます。

評価でございますが、評価書の16ページに評価結果がございまして、「遺伝子組換え微生物を利用して製造された添加物の安全性評価基準」に基づきまして評価をしました結果、ヒトの健康を損なうおそれはないという御判断をいただいているものでございます。

御意見の募集結果につきましては、最後のページにございますが、御覧のとおり御意見はございませんでした。

続きまして、資料3-7のトウモロコシでございます。

審議の経緯は3ページにございますが、先ほどと同様で、6月22日まで御意見・情報の募集を行いました案件でございます。

概要は5ページにございますけれども、本系統につきましては、トウモロコシに由来します *mepsps-02* 遺伝子と *Streptomyces viridochromogenes* に由来します *pat-09* 遺伝子を導入して作出されているものでございまして、除草剤グリホサートと除草剤グルホシネートの影響を受けずに生育できるとされているものでございます。

評価の結果でございますけれども、19ページの下段にございますように、「遺伝子組換え食品（種子植物）の安全性評価基準」に基づきまして評価をしました結果、ヒトの健康を損なうおそれはないという御判断をいただいているものでございます。

御意見の募集結果につきましては、こちらについても御意見はございませんでした。

したがって、以上2件につきましては、専門調査会の結論をもちまして、関係機関に通知をしたいと考えてございます。

説明は以上でございます。

○佐藤委員長 ありがとうございます。

ただ今の説明の内容あるいは記載事項について、御意見、御質問がありましたら、お願いいたします。特にございませんか。

それでは、本件については、遺伝子組換え食品等専門調査会におけるものと同じ結論、すなわち「JPAo001株を利用して生産されたリパーゼ」については、「遺伝子組換え微生物を利用して製造された添加物の安全性評価基準」に基づき評価した結果、ヒトの健康を損なうおそれはないと判断した。「除草剤グリホサート及びグルホシネート耐性トウモロコシMZHG0JG系統（食品）」については、「遺伝子組換え食品（種子植物）の安全性評価基準」に基づき評価した結果、ヒトの健康を損なうおそれはないと判断したということによろしゅうございますか。

（「はい」と声あり）

○佐藤委員長 ありがとうございます。

続きまして、残りの「除草剤グリホサート及びグルホシネート耐性トウモロコシMZHGOJG系統（飼料）」に関する食品健康影響評価であります。

本件については、専門調査会における審議が終了しております。

まず、担当の山添委員から説明をお願いいたします。

○山添委員 それでは、資料3-8の2ページに要約がございます。

先ほど審議いたしましたトウモロコシMZHGOJG系統の飼料としての安全性の評価になりますので、本系統の概要は、食品と同様でございます。食品としての安全性については、先ほど審議を行ったとおり、ヒトの健康を損なうおそれはないと判断しています。

「遺伝子組換え飼料及び飼料添加物の安全性評価の考え方」に基づき評価した結果、改めて「遺伝子組換え食品（種子植物）の安全性評価基準」に準じて安全性評価を行う必要はなく、当該飼料を摂取した家畜に由来する畜産物について安全上の問題はないと判断しております。

詳細については、事務局からお願いいたします。

○池田評価情報分析官 続きまして、3ページを御覧いただきまして、概要がございますけれども、先ほどの食品と同様でございます。

評価につきましては、Ⅱ.の項目にございますが、1.の項目にございますように、挿入されました遺伝子または当該遺伝子によって産生されるタンパク質が畜産物に移行することはこれまでに報告されていないということでございます。

2.にございますように、山添委員から御説明がありましたけれども、食品としての安全性評価につきましては、先ほど審議済みでございまして、ヒトの健康を損なうおそれがないと御判断をいただいております。

これらを考慮したところ、この遺伝子組換え植物に新たな有害物質が生成されることはないということで、肉、乳等の畜産物中に新たに有害物質が移行することは考えられないということでございます。また、遺伝子組換えに起因する成分が畜産物中で有害物質に変換・蓄積される可能性、あるいは家畜の代謝系に作用して新たな有害物質が生成される可能性は考えられないという御評価でございます。

以上を踏まえました評価の結論につきましては、先ほど御説明いただいたとおりでございます。

本件につきましては、既に食品としてのパブリックコメントも行っているものでございますので、これまでの取り扱いと同様に、パブリックコメントを行わず、専門調査会の結論をもちまして、関係機関に通知をしたいと考えております。

説明は以上でございます。

○佐藤委員長 ありがとうございます。

ただ今の説明の内容あるいは記載事項について、御意見、御質問がありましたら、お願いいたします。特にございませんか。よろしいですね。

それでは、本件については、意見・情報の募集手続は行わないこととし、遺伝子組換え食品等専門調査会におけるものと同じ結論、すなわち「遺伝子組換え飼料及び飼料添加物の安全性評価の考え方」に基づき評価した結果、改めて「遺伝子組換え食品（種子植物）の安全性評価基準」に準じて安全性評価を行う必要はなく、当該飼料を摂取した家畜に由来する畜産物について安全上の問題はないと判断したということによろしいでしょうか。

（「はい」と声あり）

○佐藤委員長 ありがとうございます。

(4) その他

○佐藤委員長 他に議事はありませんか。

○松原総務課長 ございません。

○佐藤委員長 それでは、本日の委員会の議事は全て終了いたしました。

次回の委員会会合は、来週7月11日火曜日14時から開催を予定しております。

また、5日水曜日14時から「添加物専門調査会」が公開で、6日木曜日10時から「六価クロムワーキンググループ」が公開で、7日金曜日14時から「農薬専門調査会幹事会」が公開で、それぞれ開催される予定となっております。

以上をもちまして、第656回「食品安全委員会」会合を閉会いたします。

どうもありがとうございました。